

小中学校における「友達」をめぐる顕在的カリキュラムの検討

— 道徳の読み物教材に描かれる友情 —

歌川 光一 (現代教育研究所 初等教育学科)

岡邑 衛 (甲子園大学)

1. 問題の所在

(1) 現代の子どもにとっての友達関係

近年、スマートフォン等を用いたインターネットの普及、特にSNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）の登場によって、人間関係にさまざまな変化が生じている。子どもたちの友達関係も例外ではない。たとえば、いじめ問題は深刻さを増し、2017年2月28日に公表された「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、いじめの認知件数は225,132件と、過去最高の件数を記録した¹。SNS上のトラブルなどに起因するいじめが問題になるなど、子どもたちの友達関係をめぐる問題は看過できない状況にある²。

いじめ問題にまで発展はせずとも、昨今の子どもたちの友達関係は、彼ら／彼女らの生活に大きな影響を及ぼしている可能性が指摘されている。本田らが中学生を対象に実施した質問紙調査の結果によると、クラス内の友人数が多いほど学校は楽しいと感じているなど、男女を問わず、特にクラス内の友達関係のあり方は彼ら／彼女らが感じる学校全体の楽しさに影響を与えている（本田2011）。また、日本におけるいじめ研究の第一人者である森田洋司は、アメリカの犯罪社会学者T・ハーシの「ソーシャル・ボンド理論」に着目し、「ボンド」すなわち「糸」（「絆」や「つながり」）の要素のうち、「愛着（attachment）」としての友だちとのつながりは「きわめて太い糸」であると指摘する（森田2010）。学校における友だちとの関係を強固なものにしておくことで、いじめや不登校といった問題を防ぐことができるという主張である。

一方で、その友達関係が子どもたちに息苦しさを与えている側面もある。土井（2008）は現代の若者たちの人間関係を「対立の回避を最優先にする」関係、すなわち「優しい関係」と呼び、友達とぶつかり合うことを様々な方法で回避する若者たちの姿を描いた。この関係をうまく築けなければ、いじめの対象となるかもしれず、若者や子どもたちにとって、友達関係の維持は非常に優先度の高い問題であり、彼ら／彼女らは日々、その関係性に神経をすり減らしながら生きているのである。

このように、現代の子どもたちの友達関係をめぐる議論は、それがもたらす光と影を明らかにしている。これらの議論は拡散しているかのように思えるが、友達関係は子どもたちの生きる世界を大きく左右する問題である、という点では一致していると考えられる。内閣府が実施した「低年齢少年の生活と意識に関する調査」（2005年度実施）や「小学生・中学生の意識に関する調査」（2013年度実施）によると、「何でも話せる友達がいる」と回答した者は2000年→2006年→2013年で71.0%→84.4%→90.2%に上昇している一方で、「友達との付き合いがめんどくさいと感じることがある」と答えた者は、10.1%→15.1%→19.7%に上昇している。また、悩みや心配事として「友達や仲間のこと」を選択した中学生も1995年→2005年で8.1%→20.1%に上昇している。これらのことも、近年、友達関係はより一層子どもたちの生活に大きな意味を持つようになってきていることの一つの証左と

言えよう。

(2) 「友達＝級友」言説

ところで、これらの議論の中で想定されている「友達」とは一体、誰のことを指しているのだろうか。児童生徒の友達に関する議論の多くでは、少なくとも日本の先行研究を見る限り、「友達＝級友（クラスメイト）」であることがほとんどである。例えば、鈴木（2012）は学校内の「地位の差」を意味する「スクールカースト」について論じているが、この「スクールカースト」をクラスメイト同士の関係性として捉えており、さらに「スクールカースト」の漢字表記として「学校内カースト」ではなく「教室内カースト」という漢字を当てている。

しかし、児童生徒に関する「友達＝級友」というイメージは普遍的なものではないという指摘もある。高橋（1997）は学級の子ども同士を「同じ学級の仲間」という集団意識をもたせなければならないという信念が、日本の学校現場にあることを指摘し、この「学級＝生活共同体」というイメージは「比較文化的・歴史的に見ても必ずしも普遍的なものではない」ことを明らかにしている。また、菅野仁は地域が「自然村」から単なる偶然にその場に住んでいる人たちの集合体となり、子どもたちも学校を単なる偶然的な関係の集まりだとしか感じていない現代においては、クラス運営において、同質的共同性よりも「並存」「共在」の作法を身につけさせることが重要であると述べる（菅野2008：63-70）。

とはいえ、学校内部では依然として「友達＝級友」と信じさせる「隠れたカリキュラム」が存在する。たとえば、日本の多くの小・中学校ではどの教科の授業も同じ学級で実施される。また、食事の時間についても、多くは同じ学級で、しかも決められた班員と向き合って食事をする。今ではランチルームでの給食も見られるようになってきたが、それであっても行動単位は学級であり、学級ごとに席に座って食事をする。また、学級内で生じた問題は、それが必ずしも全員に関係あるとは思えないことであっても、学級全体の責任として捉えられることもある。このように依然として、学校生活のいたるところに「学級」はついてくる。

「友達」と学級、学校の結びつきの自明性が揺らぐ今日においては、学校教育における「友達」の扱い方を再検討し、（介入しない時期の検討も含めた）学校教育カリキュラムの体系化を図る必要があるだろう。

本稿では、このような関心に基づく基礎的な作業の一つとして、友達に関する顕在的カリキュラムについて検討を行いたい。具体的には、指導内容として明確に「友情」を掲げている道徳の読み物教材を検討することとする。ここで読み物教材に着目するのは、コラムや書き込みに比べてストーリー性があり、児童生徒が直接読み進めることができる点において影響力大きいと考えられ、また、今後国語科の教科書や絵本等の多様なメディア（磯辺2017）との比較を行いやすくするためである。

以下、「特別の教科 道徳」における人間関係の動向を確認した上で（2）、道徳教材における友情の取り扱いを概観し（3）、まとめと今後の課題を述べる（4）。

（岡邑）

2. 「特別の教科 道徳」における人間関係の重視

現在、文部科学省は「道徳教育の充実」を推進している。2015年3月に学習指導要領の一部改正を

行い、それまで特別活動や総合的な学習の時間同様、「領域」として扱われていた道徳の時間は「特別の教科 道徳」として、ある意味「格上げ」された。価値の押し付けになるのではないか、などの問題点も指摘される中、道徳を教科として新たに位置づけたことには、子どもたちの人間関係に関して、以下の2つの理由ないし意味があると考えられる。すなわち、第一に現在生じている問題に対する対処療法的な意味と、第二に将来生じうる問題に対する未然予防的な意味である。

まず、現在生じている問題に対する対処療法的な意味について述べる。早急に対処すべき問題として現在捉えられている深刻な問題とは、前述の「いじめ問題」である。2011年の大阪市いじめ事件を契機として、2013年に「いじめ防止対策推進法」が成立するなど、ここ数年のいじめに対する関心が高まっている。SNS上のトラブルなど、今、子どもたちの友だち関係は、少なくとも大人たちには非常にわかりにくいものとなっている。このような事態が今回の道徳の改善についての議論の発端となったことは、2014年10月21日に中央教育審議会より出された「道徳に係る教育課程の改善等について」（答申）に明記されているところである。

つぎに、将来生じうる問題に対する未然予防的な意味についてである。世界に目を向けると、ヒト、モノ、カネの国境を超えた移動は勢いを増し、日本においても国際化の流れは学校生活の中にまで深く浸透しつつある³。子どもたちが将来生きる世界は、現在に増してグローバル化が進んだものになっていることが予想され、学校で「グローバル人材」を育成することが求められているのである。「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」では、グローバル化社会におけるこれらの課題に対する道徳教育の役割について以下のように記されている。

社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合を含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に重要であり、こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育は、大きな役割を果たす必要がある。（文部科学省2017：1）

同時に、国内であっても価値観の多様化が進行するなど、将来を生きる子どもたちが対処すべき人間関係に関する問題も、まさに多様化することが考えられ、道徳教育の果たす役割は大きいといえる。

以上の人間関係に関わる2つの課題に加え、道徳教育の指導に温度差があることが問題視されたことなどの理由もあり、道徳の時間は「特別の教科 道徳」として、小学校では2018年度から、中学校では2019年度から全面実施されることとなった。

（岡邑）

3. 道徳教材の検討

（1）道徳教材の動向

文部科学省は道徳教育用教材として『わたし（私）たちの道徳』（以下、『私たちの道徳』と表記）を作成し、2014年度より全国の小・中学校で使用できるように無料配布を実施し、インターネット上にも公開している。この「私たちの道徳」はそれまでの「心のノート」を全面改訂した冊子である。

文部科学省による「『私たちの道徳』活用状況等調査結果」（2014年度実施）によると、道徳の時間に使用する道徳教育用教材は、小学校では「私たちの道徳」（99.5%）、「民間の教材会社で開発・刊行した教材」（85.3%）、「都道府県、市区町村等教育委員会（教育事務所、教育センター等含む）において開発・刊行した教材」（64.2%）の順に多い。一方、中学校では「私たちの道徳」（98.4%）、「民間の教材会社で開発・刊行した教材」（78.8%）、「自作教材（学校や教員等が作成）」（65.7%）の順となっている。これらのデータより、「私たちの道徳」をほぼすべての学校で使用していること、また、「私たちの道徳」単独ではなく、そのほかの教材を組み合わせ活用している学校が多いことがわかる。

中央教育審議会は「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（2014年10月21日）において、「道徳教育の充実を図るためには、充実した教材が不可欠であり、「特別の教科道徳」（仮称）の特性を踏まえ、教材として具備すべき要件に留意しつつ、民間発行の創意工夫を生かすとともに、バランスのとれた多様な教科書を認めるという基本的な観点に立ち、中心となる教材として、検定教科書を導入することが適当である」とした。文部科学大臣はこの答申を受け、教科用図書検定調査審議会に審査基準等の審議を要請した。その後、審議会での審議結果をもとに、文部科学省は教科書検定を実施し、既に小学校の教科書については申請があった24点につき、全て合格となっている。中学校の教科書に関しては2017年度末に検定結果が発表される予定である。なお、上述の答申には「道徳教育の特性に鑑み、教科書だけでなく、多様な教材が活用されることが重要であり、国や地方公共団体は、教材の充実のための支援に努める必要があること」とあることから、これまで多くの学校において「私たちの道徳」と教科書会社が作成した教材等を組み合わせ教材としていたように、今後も、検定教科書と他の教材が組み合わせ使用されることが考えられる。

本稿では、現時点において小中学校で用いられている教材として、『私たちの道徳』（2014年）に加え、教科書会社の副読本（『きみがいちばんひかるとき』光村図書、2014年）中の読み物教材を検討の対象としたい⁴。

（岡邑）

（2）『私たちの道徳』（文部科学省）、『きみがいちばんひかるとき』（光村図書）にみる友情の概観

『学習指導要領解説 道徳編』（2008年）⁵の「主として他の人との関わりに関すること」の「内容項目の指導の観点」に、その友達観・友情観が示されている。

【小学校】

友達は家族以外で特にかかわりを深くもつ存在であり、遊び仲間などとして影響し合いながら生活をしている。また、世代が同じ者同士として、似た体験や共通の話題、互いの考え方などを交え、豊かに生きる上での大切な存在として、成長とともにその影響力を拡大させていく。（文部科学省2008:43）

【中学校】

真の友情は、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がその根底にある。それは、相手の人間的な成長と幸せを願い、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという関係である。（文部科学省2008:47）

このように学習指導要領においては、友達を学校には限定しておらず、小学校で「家族以外で特にかかわりを深くもつ存在」「豊かに生きる上での大切な存在」という認識を持つ、中学校では「真の友情」を考える、という段階が想定されている。

表：『私たちの道徳』『きみがいちばんひかるとき』における「友情・信頼」関連読み物教材

校種	学年	学習指導要領 (2008年)	『私たちの道徳』(文部科学省) における読み物教材	『きみがいちばんひかるとき』(光村図書)			
		内容	作品(作者)	・場所 ・友情を認識する きっかけ	学年	作品(作者、出典)	・場所 ・友情を認識するきっかけ
小学校	低学年	友達と仲よくし、助け合う	A.「およげないりすさん」(小野瀬稔『小学校道徳の指導資料とその利用3』文部省)	・学校外(非人間) ・悪気のない仲間外れ	1	B.「しっばいしたって」(編集委員会) C.「おちば」(東君平『ひとくち童話』フレーベル館) D.「あめふり」(牧敏雄、書きおろし)	・学校 ・友達の失敗への声かけ ・学校外(非人間) ・病気 ・学校外 ・現時点では仲良しではない友達の扱い
	中学年	友達と互いに理解し、信頼し、助け合う	G.「同じ仲間だから」(和田美美子『小学校道徳の指導資料とその利用6』文部省)	・学校 ・苦手を理由とする仲間外れ	2	E.「ブランコ」(川崎大治『きょうのおはなしなあに春』ひかりのくに) F.「たけしくんのぼうし」(園部謙一『道徳教育』1989年8月号No.351、明治図書)	・学校外(非人間) ・一人のわがまま ・学校 ・友達への声かけの失敗
					3	H.「友だちって、いいよ」(編集委員会文、『ありがとう、貴嗣わが子がくれた12年間の幸せ』幻冬舎) I.「えんぴつびな」(長崎源之助作、『長崎源之助全集第18巻 つりばしわたれ』偕成社)	・学校 ・自身の病気への励まし ・学校 ・戦争、死別
4	J.「おにぎりの味」(乙武洋匡文、『五体不満足』講談社) K.「泣いた赤おに」(浜田広介作、『ひろすけ幼年童話(3) ないた赤おに』集英社)	・学校 ・自身の障害への応援 ・学校外(非人間) ・友達の自己犠牲					
高学年	互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う	L.「知らない間の出来事」(『小学校道徳読み物資料集』文部科学省)	・学校 ・メールの誤解の連鎖	5	M.「英子ちゃんとぼく」(編集委員会作) N.「悟の失敗」(井上莉委子原作、東京都教育メディア活用研究会補作、『小学校ネット教育簡単ガイドブック』明治図書)	・学校・稽古 ・異性の幼馴染の成長 ・学校・稽古 ・メールの文面	
6	P.「絵地図の思い出」(馬場喜久雄作『道徳教育推進指導資料(指導の手引)2』文部省) Q.「いちばん高い値段の絵」(桜井信夫『みんな友だち四年生』あすなろ書房)	・学校 ・異性との協力 ・学校外 ・親友の心遣い					
中学校	友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。			1	R.「いつもいっしょに」(西野真由美『読み物資料とその利用2』)	・学校 ・仲はよいが不満もあった友達との関係悪化、他グループへの移動	
				2	S.「ネット友達」(編集員委員会) T.「友達はライバル」(芳野菊子、書下ろし)	・学校 ・SNSの過度な使用 ・学校 ・部活でのライバルの活躍に対する気持ち	
				3	U.「しるし」(辻仁成『そこに僕はいた』新潮社)	・学校(回想) ・友達の範囲	

注) 筆者作成。アルファベットは、本文中のIDを示す。

表は、学習指導要領における校種・学年ごとの内容と、『私たちの道徳』『きみがいちばんひかるとき』における「友情・信頼」関連読み物教材を整理したものである。以下、小学校低学年、中学年、高学年、中学校の順で、読み物の特徴を概観したい。

①小学校低学年

小学校低学年の指導の要点として、『学習指導要領解説 道徳編』には以下のようにある。

この段階においては、幼児期の自己中心性がまだ残り、友達の立場を理解したり自分と異なる考えを受け入れたりすることは難しいことも多い。しかし、学級の生活を共にしながら仲よく遊んだり、困っている友達のことを心配し助け合ったりする経験を積み重ね、友達のよさをより強く感じるようになる。(文部科学省2008:43)

読み物教材においても、基本的に登場人物の「自己中心性」による失敗とそれへの反省から友情を確認する展開となっている。『私たちの道徳』に掲載されている作品Aは、かめ、あひる、白鳥が池の中の島へ行こうとした際に、一緒に連れて行ってほしいと言うりすに、泳げないから駄目だと断ってしまい、後日反省するというものである。

『きみがいちばんひかるとき』に掲載されている作品B～Fも同様の傾向だが、A～Fの中でDは唯一、「友達の範囲」について考えさせる内容となっている。

おつかいから かえる とちゅう、ばらばら あめが ふって きました。でも、ふみおくんはへいきです。かさを もって いるからです。
「ふみおくん、いれて。」
「おねがい。」
うしろから、ひろみちゃんと のりこちゃんが、はしって きました。
ふみおくんは、ちょっと いやな かおを しました。ひろみちゃんとは、あまり なかよしではないからです。
「のりこちゃんは、いいけど……。」
すこし かんがえてから、ふみおくんが いうと、のりこちゃんは、
「えっ、わたしだけ。じゃ、いいわ。さようなら。」と いて、ひろみちゃんの あとを おいかけて きました。
それを みて、ふみおくんは、はっと しました。

(作品D)

②小学校中学年

小学校中学年の指導の要点として、『学習指導要領解説 道徳編』には以下のようにある。

この段階においては、気の合う友達同士で仲間をつくって自分たちの世界を確保し、楽しもうとする傾向があり、集団での活動などがこれまでになく盛んになる。しかし、自分の利害に基づく衝突が強くなることも見られる。(文部科学省2008:50)

読み物教材においても、基本的にグループや集団との友情を確認する展開となっている。『私たちの道徳』に掲載されている作品Gは、運動会の学級対抗種目のためのグループメンバー3名のうち、運動が苦手な光夫が怪我をしたことに託けて体育を休ませようとするひろしを、とも子が諫めるというものである。『きみがいちばんひかるとき』に掲載されている作品H～Kのうち、H、Jでは、病気や障害が集団との友情を確認する内容となっており、I、Kは死別、離別によって特定の一人との友情を認識する内容となっている。

③小学校高学年

小学校高学年の指導の要点として、『学習指導要領解説 道徳編』には以下のようにある。

この段階においては、これまで以上に友達を意識し、仲のよい友達との絆を深めていき、若者の流行などにも敏感になり、趣味や嗜好を同じくする閉鎖的な仲間集団を作る傾向も生まれてくる。そのため、疎外感を感じたり、友達との間で悩んだりすることが今まで以上に見られるようになり、健全な友達関係を育てていくことが一層重要になる。(文部科学省2008:57)

読み物教材においても、基本的に何らかの障壁を乗り越え、仲のよい友達との信頼関係を深めようとする展開となっている。『私たちの道徳』に掲載されている作品Lは、転校生にまつわる軽率なメールが誤った形で拡散し、その転校生が仲間外れにされてしまうという情報モラルに関わるものである。『きみがいちばんひかるとき』に掲載されている作品M～Qのうち、M、Pは異性であること、Nはメールの文面、Oは友人の病気、Qは貧困が、障壁となっている。

④中学校

中学校の指導の要点として、『学習指導要領解説 道徳編』には以下のようにある。

中学生の時期は、互いに心を許し合える友達を真剣に求めるようになる。また、親や教師に多くのことをゆだねてきた児童期から脱し、独立しようとする発達の段階にある。それゆえ、世代の違いによるものの考え方や価値観の違いを強く意識するようになり、同世代によき理解者を求めたり、心の底から打ち明けて話せる友達を得たいと願ったりする気持ちが高まってくる。しかし、そのため、ときには相手に無批判に同調したり、自分が傷つくことを恐れるあまり、最初から一定の距離をとった関係しかもたない者も出てくる。(文部科学省2008:47)

読み物教材において、『きみがいちばんひかるとき』に掲載されている作品R～Uのうち、Rでは親友との仲のきしみ、Sでは仲良しグループでのSNSの使用方法をめぐることじれ、Tでは部活動でライバル関係にある友達への妬みや憎しみに対して、対面で話し合うことを通じて真の友情に向かう内容となっている。Uは、「友達作り」という考え方や、学校における友達の範囲について、作者が回想しながら相対化し、より広く人との関わりを意識させる内容となっている。

僕は友達は作るものではなく、自然に出来るものなのだと思う。〔中略…引用者〕ともだちともだちとってつるんでいるだけが友達ではない。いつも一緒にいた奴らよりも忘れられない友達が後になっていっぱい現れたりもするものである。だから僕は友達の間口をさらに大きくとらなくてはいけないと最近思うようになった。友達という言葉には本当は僕らが想像しているよりももっともっと大きな意味がかくされているのだ。

(作品U) (歌川)

(3) 『きみがいちばんひかるとき』中の「友情」をめぐる取り扱いの系統性

『きみがいちばんひかるとき』中の「友情」の取り扱い方を小・中学校合わせて通覧すると、登場人物が人間となっている17作品中15作品が学校の友達をテーマとし、さらにそのうち11作品が明確に学級内の友人関係を描いている(表参照)。

学級内の人間関係を描く11作品は、友達の範囲について言及するUを除く10作品は、既に何らかの関係性がある友達との関係を回復させたり、深める内容であり、Uも学校内で友達の範囲の見直しを示唆するものである。既述のように、小学校学習指導要領解説では「友達は家族以外で特にかかわりを深くもつ存在であり、遊び仲間などとして影響し合いながら生活をしている」としているが、道徳教材上では級友と折り合いをつけるという意味での学級への適応に主眼が置かれている。そのため、学級が同じであることと友達であることの境界や場に応じた友達との距離感、友情が芽生えるプロセスが見えづらく、友達の範囲や関係性のあり方について「考え、議論する」展開が生まれづらいように見える。この背景として、『私たちの道徳』が強調する学級活動をはじめとする特別活動との連携が副教材にも反映されていることが挙げられる。光村図書が提供する『きみがいちばんひかるとき』を教材とする指導時案を参照すると、学級内の人間関係を描く11作品中すべてが特別活動との関連を示している(10作品が学級活動と、3作品が学校行事と、1作品が児童会活動と関連。光村図書ホームページ参照)。この関連付けがかえって教材上の「友達=級友」という図式を固定化させている側面もあるだろう。

学校の友達をテーマとしながらも明確に学級内であることを示していない4作品は、同剣道クラブ所属(M)、同サッカークラブ所属(N)、幼馴染みであること(O)、同小学校出身、同部活所属(T)、が関係のきっかけとなっている。これらはすべて小学校高学年～中学校で取り扱われているが、幼馴染や就学前(から)の友達、稽古事先での友達などを視野に入れた友情の考察は小学校低学年でも扱うことができ、「級友=友達」という図式を相対化する際に重要な役割を果たすと考えられる。

なお、今回の検討を通じて、「級友=友達」という図式以外に、道徳の読み物教材における「友情」の取り扱い方をめぐって以下の二点を論点として挙げることができる。

第一に、メールやSNS等の情報モラルの扱い方の問題である。これらは、実際にそれらの使用が想定される小学校高学年・中学校の「友情、信頼」と関連付けられ、読み物教材の中にも散見される(L、N、S)。しかし実際の内容は、手紙と対面の違いからでも引き出されるテーマ(対面でコミュニケーションをとることの重要性、書き言葉と話し言葉の印象の違い)や、友達間での遊びのルールの確立に置き換えられるテーマとなっており、友達関係と関わる情報モラルの問題は、題材を変えて(ICTを用いずに)、小学校中学年以下に分散させることも可能だろう。

第二に、教材中のジェンダー表象の問題である。例えば、同じ中学校の教材であっても女子を主人公とするR、Sは女子グループ間、内の問題が取り上げられているのに対し、男子を主人公とするTは二者のライバル関係をテーマとしている。中学生段階で見られる男女による友達関係の違いを反映させたものとはなっているかもしれないが、そもそも友情に関わるある問題・事件に関与する人物数が女子の方が多い、同じ部活動におけるライバル関係について、それが男子同士の場合に「ライバル」という語を用いやすい等、教材がジェンダー・ステレオタイプを作り出すこともありうる。思春期における友達関係の男女差それ自体を教育内容に含めるのか否かを含め、議論の余地がある。

(歌川)

4. まとめと今後の課題

本稿では、「友達」と学級、学校の結びつきの自明性の揺らぎを背景に据え、学校教育における「友達」の扱い方を再検討するための基礎的な作業の一つとして、友達に関する顕在的カリキュラムについて検討を行った。単元として明確に「友情」を掲げている道徳は、その趣旨としては「友達」の範囲を学校に限定してはならないものの、読み物教材においては、特別活動との関連付けが強く意識されていること等が主な原因となって、学級が同じであることと友達であることの境界や場に応じた友達との距離感、友情が芽生えるプロセスが見えづらい状況を確認することができた。また、情報モラルの扱い方やジェンダー表象という教材としての課題を示唆した。

本稿では分析の素材に限られたが、今後、平成30年度から使用される検定教科書や国語科等の他教科の教科書、児童書や絵本等へと分析の対象を拡大し、磯辺（2017）が示すような友情の類型を用いた内容分析や、児童生徒の教材の受容調査等の作業を想定できる。これらについては別稿に期すこととしたい。

(歌川・岡邑)

付記

本稿の執筆にあたり、昭和女子大学の研究助成を受けた。

【註】

- 1 内訳は小学校151,692件、中学校59,502件、高等学校12,664件、特別支援学校1,274件。ただしこの値は認知件数であり、実態を表しているとは限らないことにも注意しなければならない。たとえば、都道府県によっても、数値に差があることから、各自治体の取り組み具合によっても数値が左右されることが考えられる。
- 2 同調査によると、パソコンや携帯電話等を使ったいじめは、いじめの認知件数全体の4.08%である。この数値を大きいとみるかどうかは難しい問題であるが、件数にすると9,187件であり、インターネット上のいじめはとくに発見されにくいことを考えると、この数値を過小評価すべきではない。
- 3 たとえば、『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）』の結果についてによると、平成28年度の日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は過去最多の34,335人（小学校22,156人、中学校8,792人、高等学校2,915人、義務教育学校159人、中等教育学校52人、特別支援学校261人）であり、この10年で約1.5倍に増加している。同様に、海外の学校に在籍する児童生徒数も最大人数を記録している。
- 4 本稿では、既述のように今後、国語科の教科書や絵本等の多様なメディアとの比較を視野に入れるために、

東京都において公立小・中学校、中等教育学校（前期課程）の国語科で最も採択率が高い光村図書出版（東京都教育委員会ホームページ）の教材を選択した。

- 5 本稿では、『私たちの道徳』『きみがいちばんひかるとき』の発行年に合わせ、2015年一部改正学習指導要領ではなく、2008年改訂学習指導要領を参照する。

【引用・参考文献】

- 中央教育審議会「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」2014年
- 土井隆義『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書、2008年
- 本田由紀『若者の気分 学校の「空気」』岩波書店、2011年
- 磯辺菜々「絵本に描かれる『友情』イメージと友情至上主義の社会的分析」『教育・社会・文化』17、2017年
- 菅野 仁『友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える』筑摩書房、2008年
- 水引貴子・歌川光一「『友達』をめぐる保育内容（人間関係）と生活科、道徳、特別活動のカリキュラムの接続とその課題」『敬心・研究ジャーナル』1（2）、2017年
- 光村図書出版ホームページ
(<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>)
- 森田洋司『いじめとは何か』中公新書、2010年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2008年
- 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2008年
- 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2017年
- 『『私たちの道徳』活用状況等調査結果』（2014年度実施）
- 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm)
- 「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）』の結果について」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/_icsFiles/afiedfile/2017/06/21/-1386753.pdf
最終アクセス2017/9/26)
- 内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査」
(<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei2/pdf/gaiyou.pdf>)
- 「平成25年度 小学生・中学生の意識に関する調査」
(http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/junior/pdf_index.html)
- 鈴木 翔『教室内（スクール）カースト』光文社新書、2012年
- 高橋克己「『学級は“生活共同体”である』―クラス集団観の成立とゆらぎ」今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか』新曜社、1997年
- 東京都教育委員会ホームページ
(http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/p_gakko/gakuryoku.htm)

（※ URL への最終アクセスはすべて2017/9/30）